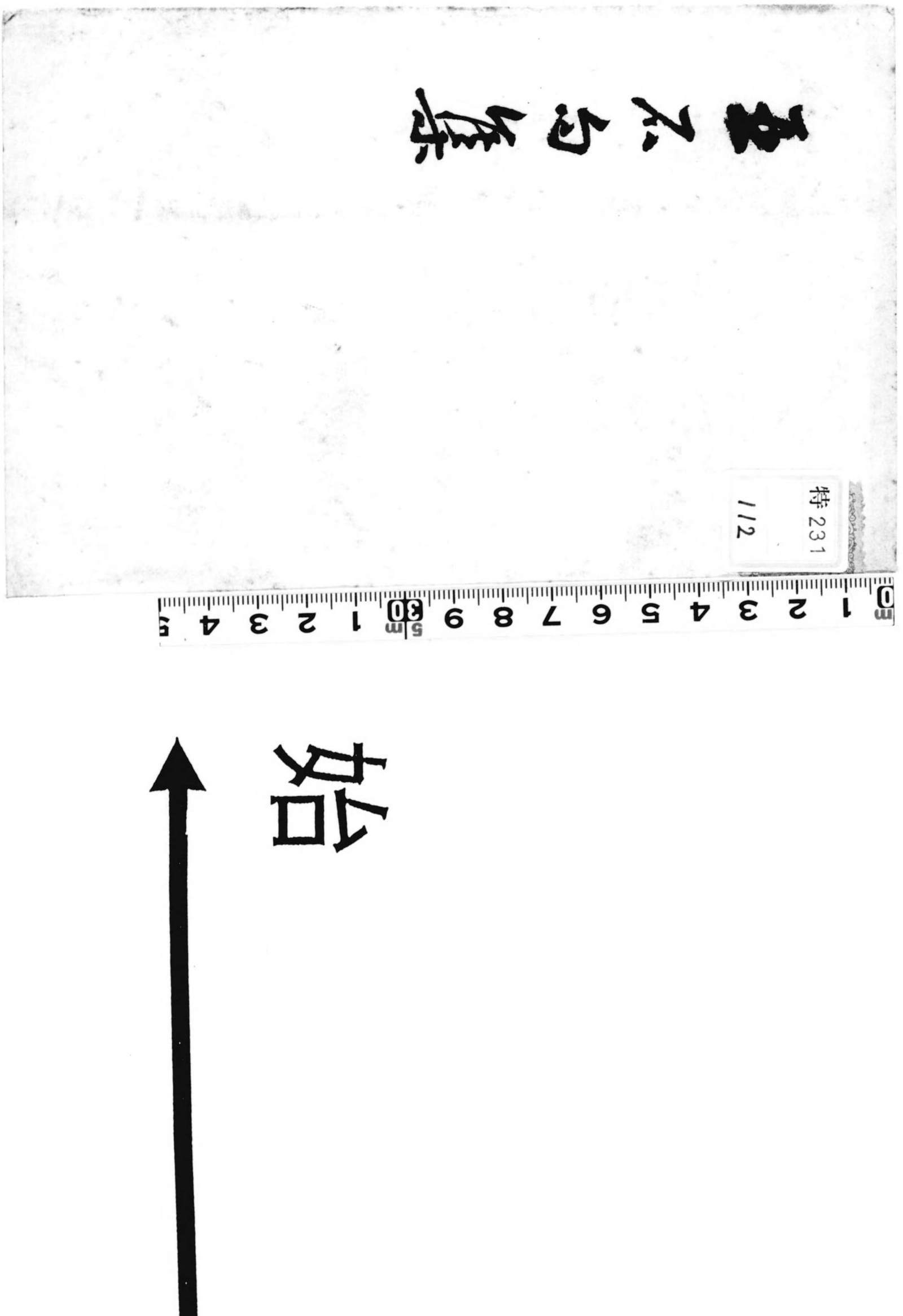
特231
1/2

特231
112

五石勾玉

木々の梢や道より出づ劉水 重石

小傳

昭和十八年七月二日、故櫻井亞石君の百箇日に當り「亞石句集」の稿成る。乃ち小傳を草して卷首に置き、以て序に代へむと欲す。

亞石君は東京の人なり。本名永治、明治三十一年二月九日、麻布區廣尾町三十五番地に生る。五歲慈母を喪ひ、專ら嚴君の手に人となる。大正六年國民新聞入社、同九年讀賣新聞に移り最近に至る。君の生涯は殆ど新聞生活に終始し、且その大半は校正を事とせりといふも不可なし。昭和十七年九月

校閲部長より轉じて調査部長となり、次いで資料部長となりしも、爾來その職に在ること僅に半歳に過ぎず。十八年三月十九日盲腸炎を發し、直に入院手術を受く。經過良好ならず。二十五日午前九時十分遂に逝く。享年四十六。上大崎戒法寺に葬る。法名永譽綏興治道信士。

君資性快活にして細心、趣味とする所少きにあらざりしかど、最も久しきに亙りて渝らざりしものを俳句とす。その はじめて之に手を染めしは大正三年、十七歳の時にして、同四年故篠原溫亭翁の許に出入するに及び、歩趨漸く定れるものゝ如し。この點はじめ暮雲、春陽等の號あり、やがて亞石に一定せると畧〻消息を同じうす。爾來約三十年、其間時に消長を免れずと雖も、全く之を廢するに至らず。昭和十年同人等と共に雜誌「谺」を創刊、句作頗る力む。殊に同十五年以降例月の會合は、舊交を溫め吟興を鼓するにとゞまらず。日夜劇務に軼掌せる君が心境轉換の機關として缺くべからざるものたりしなり。君の同人間に於ける、必ずしも話術に長ぜるに非ず、談緒に富めるに非ず、而も君一たび到れば則ち座上春風を生ずるの想あらしめしもの、實にその天稟の風格による。一朝遽に斯人を喪ひ、落莫の情禁ずべからず。その句を輯錄して在りし日の君を偲ばむとすれば、句帖手記の

類一も存せず。已むなく新聞雜誌その他を渉獵してこの一卷を成す。遺珠猶多かるべしと雖も、如何ともするに由なし。敢て君の俳句の全貌を傳ふるに足ると云はむや。たゞ吾人追慕の情の一端を慰むるに資するのみ。

亞石句集目次

新年

初荷……一
門松……一
輪飾……一
松納……一
遺羽子……二
手毬……二
初鴉……二
福壽草……二

春

如月……三
春淺し……三
寒明……三
暖……三

日永……四
春日……四
春の晝……四
春の暮……四
春の夜……四
暮春……五
二日灸……五
初午……五
彼岸……六
鞦韆……六
雛……六
畑打……七
耕……七
野遊……七
摘草……七
梭木……八
凧……八
石鹸玉……八
草餅……九
櫻餅……九
目刺……一〇
殘雪……一〇
春風……一〇
霞……一一

陽炎……一一
春雨……一一
春月……一一
春の霜……一一
春山……一二
水温む……一二
春水……一二
春潮……一三
春泥……一三
燒野……一三
鶯……一四
燕……一四
囀……一四
春の蚊……一五
蜆……一五
梅……一五
椿……一六
櫻……一六
辛夷……一七
木蘭……一七
連翹……一八
木瓜……一八
躑躅……一八

柳……一八
猫柳……一九
木の芽……一九
柳の芽……一九
桑の芽……二〇
藥……二〇
薑……二〇
山吹……二〇
藤……二〇

夏

初夏……二四
秋近……二四
蕗の薹……二一
菜の花……二一
豆の花……二一
蘆の芽……二二
草萌……二二
春草……二三
土筆……二三
山葵……二三
野蒜……二三
日盛……二四
夜の秋……二四

幟……二五
夏休……二五
夜振……二五
簗……二五
祭……二六
富士詣……二六
苗賣……二七
打水……二七
雨乞……二七
行水……二七
蟲干……二七
氷……二八
浴衣……二八
帷子……二八
甚平……二九
夏服……二九
夏足袋……二九
夏帽……二九
青簾……三〇
日除……三〇
日燒……三〇
稗蒔……三〇
起し繪……三一
風鈴……三一
釣葱……三一

日傘……三一
裸……三二
蚊遣……三二
蚊帳……三三
蠅叩……三三
コレラ……三五
團扇……三三
柏餅……三三
白玉……三四
梅雨……三四
梅雨晴……三四
薫風……三四
雹……三五
夏の空……三五
雲の峯……三五
青田……三五
清水……三六
泉……三六
瀧……三六
時鳥……三六
水雞……三七
剖葦……三七
蝙蝠……三七

鮎……三七
蛇……三八
螢……三八
毛蟲……三八
蚊……三八
蟬……三九
夏の蝶……三九
灯取蟲……三九
水馬……三九
蚰蜒……四〇
蝸牛……四〇
柿の花……四〇
桐の花……四一
栗の花……四一
石榴花……四一
百日紅……四一
夾竹桃……四一
若葉……四二
櫻……四二
實梅……四二
枇杷……四三
林檎……四三
櫻の實……四三
若竹……四四
玉卷芭蕉……四四

牡丹……四四
芍薬……四四
薔薇……四四
芥子……四五
葵……四五
紫陽花……四五
百合……四六
夏菊……四六
月見草……四六
松葉牡丹……四七

秋

七月……五一
河骨……四七
蓮……四七
夏草……四七
苺……四八
麥……四八
南瓜……四九
茄子……四九
萍……四九
眞菰……四九
新涼……五一

二百十日……五一
秋の夜……五一
夜長……五二
肌寒……五二
夜寒……五二
冬近……五二
暮秋……五三
秋雛……五三
盂蘭盆……五三
迎火……五三
花火……五四
海嘯打……五四
子規忌……五四
秋の蚊帳……五五
囮……五四
沙魚釣……五五
障子貼……五五
障子洗……五五
新米……五五
天の川……五八
野分……五六
月……五六
五日月……五六
稲妻……五六

秋日……五七
秋雨……五七
秋霜……五七
秋の川……五八
刈田……五八
秋田水……五八
雁……五九
椋鳥……五九
渡鳥……五九
鱸……五九
蟲……五九
ちゝろ蟲……六〇
蟲斯……六〇
蜻蛉……六〇
螽……六一
芙蓉……六一
椎の實……六一
團栗……六一
栗……六二
柿……六二
朝顔……六三
萩……六三
鳳仙花……六三

曼珠沙華……六四
菊……六四
蓼花……六四
犬蓼……六五
龍膽……六五
コスモス……六五
芒……六六
芋……六六
雞頭……六七
葉雞頭……六七
末枯……六七
稻……六八
玉蜀黍……六八
絲瓜……六八
烏瓜……六八
菌……六九
五味子……六九

冬

小春……七〇
冬の夜……七〇
寒……七〇

酉の市……七一
火事……七一
焚火……七一
餅搗……七二
屏風……七二
襟巻……七二
冬帽……七二
冬座敷……七三
風邪……七三
胼……七三
霜除……七三
蒲團……七三
榾……七四

冬日……七四
寒月……七四
冬の雨……七四
時雨……七五
雪……七五
霜……七五
木枯……七六
冬晴……七六
冬の山……七六
冬田……七六
冬川……七七

鷹……七七
梟……七七
寒雀……七七
鴛鴦……七八
水鳥……七八
河豚……七八
山茶花……七九
茶の花……七九
冬の梅……七九
枯木……七九
冬木……八〇

落葉……八〇
實南天……八〇
青木の實……八一
藪柑子……八一
寒菊……八一
水仙……八一
枯草……八二
枯芒……八二
大根……八二
葱……八二

新年

初荷　濠端に出でて初荷の續きけり　（大十一）

門松　門松の門の古さを潛りけり　（大十一）

輪飾　輪飾のかゝりて井桁古きかな　（大十一）

松納　向ひあひて松とる人の話しけり　（昭三）

遺羽子　静かさに羽子ひら〳〵とつかれけり　（大十一）

手毬　浪終日凪ぎし倉間ヒの手毬かな　（大十）

初鴉　仰ぐ樹に白き月あり初鴉　（大五）

福壽草　福壽草育たず苦と枯るゝかな　（昭九）

日當りて影脈はしや福壽草　（昭十六）

春

如月　如月や廣がり殖えし焚火跡　（昭十）

如月や漣立てゝ夕日川　（昭十七）

春淺し　春淺き疊の上や蕗の薹　（昭十八）

寒明　寒明の夜頃雨來ぬ昨日今日　（昭十八）

暖　暖や水ひたし〳〵と蟹の穴　（大五）

日永　木瓜の影芝にくひ入る日永かな　（昭十二）

春日　囲かけて心静けき春日かな　（大六）

春晝　春晝の田毎の人や霞み居る　（昭十七）

春の暮　馬車立ちて宿の掃除や春の暮　（大八）

春の夜　春の夜や疊の上の盆一つ　（大十二）

暮春　挿木枯れし水邊に春を惜みけり　（大八）

行春の庭平かに木影かな　（大九）

春暮るゝ木の間の苗木見て廻る　（昭十六）

二日灸　二日灸二人竝びてすゑにけり　（大十）

初午　初午の後や事なく庭を掃く　（昭三）

彼岸　蝶人に驚き飛べり彼岸空　（大六）

鞦韆　鞦韆や木々の芽ゆるゝ梢より　（大六）

雛　雛過ぎし古畳掃く朝なゝ　（大八）

大風に閉して雛に灯ともせり　（大九）

數多く灯せど淋し古雛　（同）

起居靜に雛飾りゐて憂なし　（大十一）

雛をかざり來し母畑にやさしけれ　（大十二）

隅田川の明るき部屋の雛かな　（同）

畑打　背き打つ夫婦の畑の土躍る　（大五）

耕　耕の揃へば淋し土の音　（大十一）

野遊　野遊や笛吹かるゝ下駄草履　（昭十七）

摘草　草摘める眼前に心澄む樹かな　（大五）

摘草に迫り來し帆の高さかな　（大十五）

椶木

枯蔓のからく〜と鳴る椶木かな　（大六）

椶に落ちて椶木の葉白し　（大十二）

凧

玉川向う六角凧の流行りけり　（大十一）

甍雪の山大晴や凧　（昭十七）

凧の尾の屋根に音して昇りけり　（同　）

椋の上の夕空廣し凧一つ　（同　）

石鹸玉

母の顔それて高さよ石鹸玉　（昭十六）

草餅

草餅や障子かげりて母と居る　（大八）

草餅や屏風の陰の緋座蒲團　（昭十二）

草餅や赤き器に五つほど　（昭十七）

櫻餅

惜別の灯に殘りあり櫻餅　（大六）

戸をしめて雨しげくなりぬ櫻餅　（大九）

寐轉びて團欒更けぬ櫻餅　（昭二）

旅にゐて二月の町や櫻餅　（同　）

疊かへしその夜の雨や櫻餅　（昭十六）

目刺　逗留の客おちつきし目刺かな　（大十二）

殘雪　殘雪や赤城と暮るゝ屋根の石　（昭四）

春風　芽を吹きし藥草畑や春の風　（大五）

春風やしたしみ竝ぶ苗の影　（大六）

霞　牛放ち呆と霞の畑に在り　（昭十六）

陽炎　牛の背に陽炎もえて海碧し　（昭十）

春雨　軒近く濡るゝポストや春の雨　（昭十五）

春月　灯明き障子の外や春の月　（昭十六）

春の霜　春霜や砂に吹かるゝ花豌豆　（大十）

春山　春山に薊したしみ憩ひけり　（大六）

谺かへして木瓜静なり春の山　（同）

駕の下に穿く赤草履春の山　（大八）

春山や門内静に人歩む　（大十一）

春の山遠く旗出す茶店かな　（昭十五）

水温む　水温む泡を流して竹瓮かな　（大七）

春水　春の水に今打つ杭の歪むかな　（大六）

春の水汲む時底の石躍る　（同）

春潮　春潮の障子の内の鏡立　（大九）

沖へ出て我村低し春の潮　（昭十五）

春潮や曙早き岬宿　（昭十七）

春泥　春泥や吉原近き煙草店　（大十五）

燒野　野火赫と燃え立つや又一しきり　（大六）

野を燒くや遠くに牛の遊び居る　（同）

舷の人に富士高し春の水　（大八）

鶯

古庭や鶯失せし笹葎　（昭三）

燕

風の無き電線細し燕　（大十）

囀

囀やなれぬに重き肥一荷　（大五）

囀や草に吹かれて蝶遠し　（大八）

囀に燃え走る野火の靜かな　（大九）

囀に明けて日永し百姓家　（昭十六）

春の蚊

包解きし土筆に浮ぶ春蚊かな　（大十）

蜆

水澄んで砂に蜆の現れし　（大五）

逗留の或日の雨や蜆汁　（昭十七）

梅

錠かたき古井の蓋や梅屋敷　（大五）

藁家に人入りぬ畑の梅白し　（大九）

繪馬かけておのづと梅の下に來し　（昭十五）

椿

大幹の霜とけ濡れし椿かな　（大九）
藪窪や椿又落つ龍の髯　（同）
椿山高からずして登りけり　（大十）
竹藪の中や日當る古椿　（昭三）
落椿落ち重りて圓きかな　（昭四）

櫻

花の幕を取りし廣さや沓の跡　（大七）
かたまりて舟水上ミや花の雨　（大八）
山裏の貸別莊や八重櫻　（昭三）

堂出でし眼に花白き夕かな　（昭六）
堰落ちし落花や泡と流れけり　（昭十）
雨がちに花もをはりや昨日今日　（同）
御幸後の櫻靜けく散りにけり　（昭十五）

辛夷

辛夷曇れば人沈丁に至るかな　（大六）

木蘭

白木蘭に芝廣々と陽炎へり　（昭十七）
木蘭の人や下なき榻二つ　（同）
木蘭にひねもす影や甃　（同）

連翹

連翹の枝見えずして咲きゐたり　（昭十六）

連翹に鞦韆の影やあからさま　（同十七）

木瓜

野良著投げて花木瓜躍りかくれけり　（大十）

躑躅

只一木つゝじに庭や明るけれ　（昭四）

柳

柳影亂して黄バス停りけり　（昭十五）

百貨店閉す風雨の柳かな　（昭十七）

猫柳

畦蹈めば搖るゝ水邊や猫柳　（昭十七）

水苔の青む早さや猫柳　（同十）

木の芽

木々の芽や迸り出づ厨水　（大十）

木の芽風塔の扉をあふりけり　（昭十）

風邪癒えし眼を驚かす木の芽かな　（昭十七）

柳の芽

小鳥飛びて空の深さや柳の芽　（大九）

桑の芽　桑の芽や藁ほどかれて圓々と　（大八）

藁　逗留の雨に藁えし胡桃かな　（大八）

菫　人去にし幕の外なる菫かな　（昭十七）

山吹　棕梠を吹く風又山吹に至りけり　（大六）

山吹や廐空しく庇垂る　（天十）

藤　朝な〳〵藤爽に掃かれけり　（大十二）

藤棚の影の遠さや潦　（昭十五）

藤棚の影已にある朝餉かな　（同　）

蕗の薹　ごう〳〵と藪鳴る下や蕗の薹　（昭十六）

蕗の薹崖暖に屋敷内　（同　）

菜の花　菜の花に廣々走るかげりかな　（昭十）

豆の花　豌豆の花に俄の雨強し　（大五）

豆咲いて雨いつ來るとなき日數かな　（大六）

蘆の芽　旭出でて砂滑かや蘆の角　（大六）

蘆芽ぐむ中の流や平かに　（昭三）

草萌　草萌ゆる處馬來ぬ草競馬　（昭十二）

やゝ高き榛の根方や草萌る　（昭十六）

春草　塔を下りし人に疎らや春の草　（大八）

頂に來て湖小さし春の草　（同　）

土筆　砂利山の土筆まばらに太きかな　（昭十六）

山葵　山葵田に立てば縦横の木影かな　（昭十七）

山葵田の水や裏より宿に入る　（同　）

野蒜　古年の堤なつかし野蒜など　（昭十八）

夏

初夏　かなめ垣つやゝかに墓地や夏に入る　（昭十七）

秋近　柚小屋に乾す索麪や秋近し　（大四）

日盛　日盛に馬鈴薯掘るや土白し　（大六）

夜の秋　夜の秋の我身に白き浴衣かな　（大十二）

幟　車馬繁き千住の橋や遠幟　（昭十五）

鯉幟垂れし狹庭や茱萸の花　（同）

月已に忘れ幟にかゝりけり　（同）

夏休　夏休の掲示に合歡の日數かな　（大五）

夜振　うしろより風吹き過ぎし夜振かな　（大六）

簗　鯰の子かゝりて簗の靜かな　（大九）

空既に秋立ちぬ簗かけ廻る　（同　）

祭

畑々に馬鈴薯の花や里祭　（大五）

雨の中に紫陽花剪りぬ祭人　（大六）

刈麥を堆く積んで祭かな　（同　）

家移りの往來に町の祭かな　（大八）

窗の下町こまゞゝと祭かな　（大九）

富士詣

富士に來て句なき句帖のなつかしき　（大九）

苗賣

苗賣の去りし門邊や水を打つ　（昭十五）

打水

打水や門内早き夕かげり　（昭二）

雨乞

雨乞の唄も獨りや草を刈る　（大六）

行水

下駄濡らし行水の人上り來る　（昭二）

行水の肩や冷え行く畠風　（同　）

蟲干

蟲干や麥打つ埃鄰から　（大五）

蟲干や日陰殖え來て合歡涼し　（昭十七）

泳

潮高くなりし泳場や酒賣るゝ　（大十）

なれし海に泳ぐ安さよ岸遠し　（昭十六）

浴衣

縞浴衣飛白浴衣と乾きけり　（昭二）

帷子

帷子に窗開け放つ細工かな　（大六）

松の高さに水打てる父や黄帷子　（同）

甚平

甚平著し兄畑に來れば父に似し　（大五）

夏服

夏服や休暇待つ身に汚れたる　（大九）

軍港や夏服殖えて山よ濃し　（大十）

夏足袋

寺にゐて夏足袋の白さ汚しけり　（大九）

夏帽

菖蒲見の人たまさかや夏帽子　（昭十四）

夏帽の人散る驛の並木かな　（同）

青簾　青簾映りて古き鏡かな　（大八）

日除　深々と庇に古りし日除かな　（昭三）

日燒　雲の下に眞菰束ねぬ日燒人　（大六）

日燒人に岩高く潮流れけり　（同）

稗蒔　稗蒔や夕賑へる芝居町　（昭二）

稗蒔や簾しづかに月上る　（昭十六）

起し繪　起し繪の灯に重りて人遠し　（大八）

風鈴　風鈴の眞下紙散る句會かな　（昭十五）

釣葱　懶さになれて葱に水をやる　（大十）

日傘　若楓の瀧壺に袞す日傘かな　（大六）

ぽつ〳〵と來し雨乾く日傘かな　（大八）

濱風を厭ひ砂蹈む日傘かな　（昭十六）

裸

大刀根の夕べ茄子もぐ裸かな　（大六）

裸子に向日葵高き蜻蛉かな　（昭十六）

蚊遣

母とゐて愁尙あり蚊遣香　（大六）

蚊遣火に風變りたる端居かな　（昭三）

蚊帳

蚊帳の人に枇杷の上なる月古し　（大六）

曙の蚊帳色出でし青さかな　（昭十五）

山莊や幮波うつて夜明けたり　（同）

蠅叩

雨の日の疊に古りぬ蠅叩　（大九）

コレラ

水上にコレラありて町祭かな　（大九）

コレラありて寂れし町の物價かな　（同）

團扇

團扇白く夜の家庭となりにけり　（大十一）

柏餅

朱の盆に葉の廣がりや柏餅　（大十一）

白玉　白玉や夜濯ぎ了へし妻と在り　（昭十六）

梅雨　梅雨の花一かたまりや窗の下　（大九）

梅雨晴　梅雨晴の盆栽蒼し松槭　（昭十七）

薫風　薫風や大蛾番ひて水の上　（大六）

薫風や腐れ實落つる苔の上　（同）

電　電の中に色わかたざる葵かな　（大八）

忽に電降りたまる板樋かな　（昭十七）

夏の空　ひら〳〵と芥子の紅さや夏の空　（大十一）

雲の峯　雲の峯崩れて嶋の大雨かな　（大五）

青田　橋見えずなりし青田の廣さかな　（大十）

電柱もなくて青田や最上川　（昭三）

清水　清水汲みに葛の道行く手燭かな　（大七）

泉　大枯の松葉日に散る泉かな　（大六）

瀧　瀧近き朴の廣葉や蝶失せぬ　（昭十六）

皆寢ねし宿の厠や瀧の音　（同十一）

時鳥　提灯に草の高さやほとゝぎす　（大八）

蓁家灯りてぼうと畠やほとゝぎす　（大九）

水雞　水雞鳴くや繩綯ふ人に風呂立てし　（大五）

剖葦　剖葦や舟續き著く夕日中　（大十一）

蝙蝠　宿とれば馬具造る家や蚊喰鳥　（大五）

蝙蝠や茅沼暮るゝ工場の灯　（同）

鮎　鮎漁や厚木に近き一ト流れ　（昭四）

蛇

蛇を見し心淋しき水邊かな　（大六）

草籠を蛇落ちて鎌大なる　（大八）

螢

團扇置いて草冷かや飛ぶ螢　（大八）

毛蟲

松の毛蟲楓に落ちて太々し　（昭十五）

蚊

蚊の路地に遊べば用の迎ひ來し　（大五）

晝の蚊の面上を飛ぶ病かな　（昭十七）

蟬

蟬取の竿行く高し門の内　（大五）

晴れて來し公園已に蟬時雨　（昭十六）

夏の蝶

這ひ蔓に萎れし花や夏の蝶　（大六）

かたまりて夏蝶落ちぬ麻の中　（大八）

灯取蟲

灯取蟲來ぬ夜たゞ聽く怒濤かな　（大六）

水馬

ほしいまゝに遊びて失せぬ水馬　（大六）

夕川を泳ぐ一人や水馬　（昭十六）
堰下の流るゝ泡や水馬　（同　）

蚰蜒　蚰蜒の壁に影して失せにけり　（昭十六）

蝸牛　寺厠の廣ければ淋し蝸牛　（大八）

梯の花　梯の花風雨に逢はで散りはじむ　（大五）

桐の花　明るさの雨花桐に通りけり　（大十一）

栗の花　栗の花散りて久しや板庇　（昭十七）

石榴花　障子しめて寛しづかや花石榴　（大八）
塗替へし亞鉛庇や花石榴　（昭十六）

百日紅　百日紅に眞晝の寺の簾かな　（昭十七）

夾竹桃　水打てど乾く早さよ夾竹桃　（昭十六）

若葉

澤石に蟹の泡ふく若葉かな　（大四）

若葉山橋見えそめて馬車躍る　（大十九）

濯女に空變る早き若葉かな　（大十）

杉中の雜木若葉や日に光る　（昭十五）

葉櫻

葉櫻の門開け放ち深さかな　（大十一）

實梅

青梅や人到らざる茂り中　（昭四）

梅拐ぎし竿そのまゝや月出づる　（昭十）

實梅取りしその夜音なく雨の來し　（同）

青梅の同じ處に落ちにけり　（昭十五）

枇杷

落枇杷や泥うち上げて窗の下　（大九）

長雨となりて大枇杷の古木かな　（同）

林檎

驟雨去りし海平かや林檎畑　（大八）

櫻の實

古庭や落ちずなりたる櫻の實　（大九）

若竹　若竹に風這ひ來るや蕗の中　（大五）

玉巻芭蕉　玉巻ける窗の芭蕉や應接間　（昭十七）

牡丹　眞晝出て牡丹を剪るや風の中　（大六）

牡丹園道平かに曲りけり　（大十四）

芍藥　芍藥の散りて遠さや草の中　（大八）

薔薇　バルコニーに日高き芝のさうびがな　（昭十七）

紅薔薇の葉もなく垂れし一花かな　（同）

芥子　雲となりし湖風強し芥子を剪る　（大八）

夕芥子や莖細々と二三本　（大十四）

立場茶屋の日中の雨や芥子の花　（昭二）

葵　霍亂のさめて水打つ葵かな　（大六）

紫陽花　紫陽花やいつも古川なつかしき　（大六）

紫陽花やふらこゝ古りて繕はず　（昭二）

紫陽花の映る鏡に向ひけり　（昭十五）

百合

泳ぎ子に山夕づけば百合白し　（昭十六）

夏菊

ほそ〳〵と夏菊咲くや寺畠　（大五）

月見草

泳ぎ子に高く淋しや月見草　（大九）

西日して海變りけり月見草　（同）

夕雲にほつ〳〵起きぬ月見草　（同）

山にかゝりて夜の汽車遅し月見草　（昭十五）

松葉牡丹

嘲出れば濤已に高し松葉牡丹　（大六）

松葉牡丹赤し寮出る泳ぎ子に　（昭十七）

河骨

河骨の花を映して水浅し　（大十二）

蓮

蓮池に戸を繰れば花遠きかな　（大六）

夏草

夏草を刈り來し鎌の大なり　（大五）

瀧音の上に夏草を刈り急ぐ　（大八）

夏草に庇低さや雨の小屋　（同）

苺

苺はや薄枯色にはびこれり　（大九）

大苺蔓細々とはびこれり　（同）

廣がりて夕日しづかや苺畑　（大十）

麥

麥秋や築をかつぎて橋の上　（大七）

潮遙に道より高し麥の秋　（大九）

麥秋や丘躍り來るバス一つ　（昭十五）

麥秋の起伏の涯や兵士居る　（昭十六）

麥の穂に家建ち進む門二つ　（昭十七）

南瓜

果をとりて南瓜の花の咲き絶えし　（大十一）

茄子

櫛探す茄子畑の妹に月上る　（大六）

我門の道茄子畑へ乾きゐし　（大十）

萍

萍流す人に夕立はや來たり　（大五）

眞菰

落日や眞菰を刈れる顔赤し　（大五）

ゆゝしさや眞菰に張りて古帆鳴る　（大十）

秋

七月　七月や干飯盈たる壺一つ　（大八）

七月の大山駈る駕屋かな　（同）

新涼　新涼の厨に立てば湖見ゆる　（昭十七）

二百十日　苫舟や二百十日の舳人　（大十）

秋の夜　秋の夜や蒟蒻沈み桶二つ　（大八）

秋の夜の燈下に白き行李かな　（大十五）

夜長　夜長人の影や屏風の中にあり　（大九）

肌寒　肌寒や懐深き革財布　（昭二）

夜寒　風呂の灯の厨に到る夜寒かな　（昭十五）

冬近　冬近き原の日當る障子かな　（大十一）

暮秋　行く秋の日當り廣し籬外　（大八）

秋雜　夜更けて髯長蟲や蚊帳の秋　（大五）

行啓や紅葉におそき嶋の秋　（大八）

盂蘭盆　盆提灯更けし端居や母と居る　（昭十七）

迎火　迎火の消えて暗さや浪の音　（昭十五）

花火　花火消えて暗き佃の渡かな　（昭十六）

海嬴打　草の花に海嬴又とびて見えぬかな　（大八）

子規忌　子規忌修す家雞頭の林かな　（昭十六）

秋の蚊帳　家深く灯火くらし秋の蚊帳　（昭十七）

囮　囮かけて青天高し芒原　（大六）

沙魚釣　沙魚釣の皆釣れて來し夕かな　（昭十五）

障子貼　貼かへし障子の陰や糊の盆　（大十二）

障子貼る手許夕づきぬ鵙の聲　（昭十七）

障子洗　枝川に障子洗ふや小家がち　（昭十六）

新米　古桝に新米白く量りけり　（昭十五）

天の川　灯を消して天幕皆寐ねぬ天の川　（昭十五）

野分　野分すや厩が窗の藪からし　（大五）

野分跡に影濃き雞頭二本かな　（大七）

月　谷毎に月の吊橋かゝり居り　（昭十五）

五日月　臼しまふ稲小舍暗し五日月　（大五）

稲妻　稲妻に幽と靜けき障子かな　（大六）

秋日　鰡しきり飛ぶや秋の日浪にあり　（大六）

秋の日の芙蓉の中に當りけり　（大十二）

秋雨　秋雨や今日二つ見る岬の灯　（大五）

秋雨や通草の蔓の見飽きたり　（同　）

葉の中に無花果の幹や秋の雨　（昭十五）

秋雨や仔山羊の食める青き草　（同　）

秋霜　水霜にガラス戸濡れて薔薇紅し　（昭十五）

秋の川　底見えて緩き流や秋の川　（昭十五）

刈田　錢湯の裏は風吹く刈田かな　（昭十七）

水澄める荷田靜けき刈田かな　（同　）

秋出水　出水後の空の青さに遊びけり　（大九）

雁　早く來て風呂待つ宿や雁の聲　（大四）

椋鳥　椋鳥や池に影して夥し　（昭十六）

渡鳥　試作蕎麥當れる山や鳥渡る　（大五）

黍あれし空の廣さや渡り鳥　（大七）

鱸　魚籃のまゝ鱸貰ひぬ鄰より　（昭十五）

蟲　蟲鳴くや我より高き月の夢　（大五）

紫蘇を摘むそこらに蟲の鳴きにけり　（同　）

鐵門を鎖して蟲の一廬かな　（昭十五）

ちゝろ蟲　玄關の八ッ手に暗しちゝろ蟲　（昭十五）

螽斯　髯長く簾の裏やきり〳〵す　（昭六）

蜻蛉　無花果の空朝燒や蜻蛉來る　（大五）

湖の蜻蛉つい〳〵來るや花畠　（同　）

螳螂　螳螂の芒に育ち細きかな　（昭二）

霜近く葉裏づたひやいぼむしり　（昭十七）

芙蓉　月落ちて芙蓉に雨の來りけり　（大五）

旭の芙蓉に遊べる蟲を捕へけり　（同　）

椎の實　椎拾ふ子に雞頭の影長し　（大五）

團栗　團栗を蹈みて人ゐる住ひかな　（昭十五）

栗

つゞけざまに栗落つ音や前うしろ　（昭十）

柿

送られし柿を描きて一人かな　（大五）

柿拐げばはら〳〵と枯葉高きより　（同　〃）

見極めし柿深空に失ひぬ　（大八）

夜拐ぎ柿色さまゞに燈下かな　（同　〃）

朝柿をもぐ冷たさや掌　（大十一）

柿過ぎし梢の空や日々碧し　（昭十五）

外厠に柿もぐ竿の見えにけり　（同　〃）

朝顔

朝顔や假の住ひの屋敷内　（昭十七）

萩

萩の空飛び來て白き蝶々かな　（大五）

蜻蛉皆高くなりたる野萩かな　（大十）

朝影や庭の廣さを萩淋し　（大十二）

萩に立てば谷風裾を吹きあげぬ　（昭五）

大萩を束ねて邊り掃きにけり　（昭十五）

鳳仙花

灯ともせば弱き地震や鳳仙花　（大五）

曼珠沙華

葬列に父を見出しぬ曼珠沙華　（大五）

垣外の夕日の原や曼珠沙華　（大十五）

菊

菊剪つて雨長びける畠かな　（大五）

障子しめて月なほ菊にありにけり　（同）

往來する晴著の人や菊の前　（大十二）

法事人しづかに床の菊白し　（昭十五）

菊に立つ人各〻の靜心　（同）

蓼花

花蓼の色うつろひて蝶小さし　（大五）

厨出づれば夕燒烈し蓼を摘む　（大六）

犬蓼

犬蓼に强雨そのまゝ暮れにけり　（大五）

龍膽

龍膽に山深き日のあたりけり　（大十二）

コスモス

コスモスの高きに路地の月出たり　（大五）

コスモスのかげりし夕日屋根にあり　（昭十七）

芒

人蹈まぬ火薬庫の跡の芒かな　（大四）

葱畑に伏せし芒やとびつくす　（大五）

芒穂のあてなく飛べる日陰かな　（同）

秋肥の肩かはしけり芒中　（大十一）

絲芒萩かぶさりて恙なし　（昭六）

夕芒沼尻徑に月上る　（昭十七）

芋

芋掘るやかぶさる土のあたゝまり　（大五）

山畑に一人晝餉や芋の秋　（同）

雞頭

月落ちて雞頭黑し藏の間　（大六）

休暇了へし眼に雞頭の高さかな　（大九）

葉雞頭

たちまちに祭過ぎけり雁來紅　（大十一）

雁來紅の色も暮るゝや畠人　（昭八）

崖上の庭の廣さや葉雞頭　（昭十五）

鎌倉の寺内の家や葉雞頭　（同）

末枯

末枯や門閉しゐて畑作り　（大十五）

末枯やタとなりし地鎮祭　（昭十六）

町中に末枯るゝ原や潦　（同　）

末枯や夕日當れる鹿の尻　（同　）

稻

稻刈つて競馬場の柵高きかな　（大四）

玉蜀黍

畑境玉蜀黍におのづから　（昭十七）

絲瓜

絲瓜垂るゝ末葉の陰や花一つ　（昭十六）

烏瓜

烏瓜相へだたりて赤らみぬ　（昭十六）

藪中のしづかなる日や烏瓜　（同　）

菌

熊笹に茸燒く煙の這ひゆける　（大五）

茸見つけてかゞむや我の足袋白し　（同　）

五味子

古櫨の殘り葉赤しさねかづら　（昭十七）

冬

小春

牛なけば豚動き出す小春かな　（大四）

小春山の高さ相似て静かなる　（大十）

多磨墓地の小春働く石工かな　（昭十六）

冬の夜

行李置いて疊色あり夜半の冬　（大六）

爐火焚けば柱面白し夜半の冬　（同　）

寒

船窗に見えて平や寒の海　（大九）

寒の水滴る音や厨中　（大十一）

寒に入りて杏ほの紅き丁子かな　（昭十七）

寒入や門邊の桶に日當る　（昭十八）

酉の市

ぬかるみにまだ降る雨や熊手店　（昭十五）

火事

葱畑に畫火事の人通りけり　（大八）

焚火

燃え旺る焚火に尻を向けにけり　（昭十五）

餅搗　餅臼の溫みのまゝを返しけり　（大十三）

屏風　去る人に金屏の色動きけり　（大十二）

襟卷　襟卷や日中曇る舟の上　（昭十七）

冬帽　冬帽の鍔深く日の當りけり　（大十一）

エレベーター社長も我も冬帽子　（大十五）

冬座敷　冬座敷灯れば有りし林檎かな　（大十一）

風邪　葱刻む前に風邪の子つゝましき　（大五）

風邪人に蠅絡りぬ衿ほとり　（昭十六）

胼　胼の手にまろ〳〵とある蜜柑かな　（大六）

霜除　霜除の影ばかりなる月夜かな　（昭十七）

蒲團　榾火赫と色をうつせし蒲團かな　（大八）

榾

大なる草鞋の裏や榾燃ゆる　（昭十七）

冬日

還御後の濠端寒き冬日かな　（昭十六）

寒月

寒月や舟皆下モに隅田川　（昭十六）

冬の雨

家移りの暮れて著く荷や冬の雨　（昭二）

時雨

時雨るゝや松を疎らに朱き門　（大五）

大松の時雨に這へる煙かな　（大六）

巨濤に何時か時雨れぬ濱庇　（同）

時雨後の夜店淋しや小買物　（昭三）

雪

雪晴の二階靜に掃きにけり　（大六）

艦見んと雪深き葱の畑を來し　（大七）

霜

霜崩るゝ日の畑に鍬あてにけり　（大六）

霜庇出て湯煙や青天に　（大八）

霜土にべたと廣さや大根の葉　（大十）

木枯　木枯や藁家廻りて日の畠　（大八）

冬晴　冬晴に霜解を蹈む日向かな　（大五）

冬の山　冬山の低き日當る庇かな　（大十一）

冬田　藁積んで冬田の風を鎖しけり　（大五）

冬川　冬川の水いさゝかや橋の下　（昭十七）

冬川を越えて高さや凧　（昭十八）

鷹　落日に鷹繪の如し風の椎　（大六）

梟　梟鳴く杜遠く星や又隕つる　（昭十六）

寒雀　籠を編む外の日向や寒雀　（昭六）

鴛鴦

鴛鴦に雨つのり來て落葉鳴る　（大五）

鴛鴦に移りゆく東のまの心かな　（同）

水鳥

夕日ひろげ行く水鳥の一つかな　（大五）

日高くなりぬ水鳥廻りけり　（大九）

河豚

長旅の師を犒ふや河豚の宿　（昭十七）

山茶花

山茶花の靜なる垣を廻らしぬ　（大十）

茶の花

夕日烈しく茶の花染めて靜かな　（大五）

花茶插して健かに爐に向ひけり　（同）

黒土に茶の花落ちて久しけれ　（大十一）

冬の梅

標札を變へて新居や冬の梅　（昭五）

枯木

山下りてはてしなき道の枯木かな　（大五）

ふらこゝの繩細々と枯木かな　（大十一）

冬木　人入れて冬木夕日に立細る　（大九）

落葉　三百の石段高き落葉かな　（大三）

大池の徑あかるき落葉かな　（大八）

バウリスタの灯に篠懸の落葉見し　（大十一）

欅落葉街道越えし畠中　（昭十五）

實南天　風出でし玻璃戸の外や實南天　（昭十七）

青木の實　つくばひに去年の氷や青木の實　（昭十七）

藪柑子　山枯に提灯躍る藪柑子　（大八）

藪柑子に夕づきし日の深くまで　（昭十八）

寒菊　寒菊に山里の雪久しけれ　（大六）

霜除の寒菊に遠き日向かな　（同）

水仙　藪垣に雞の卵や水仙花　（大五）

山の色に枯れし籬や水仙花　（大八）

水仙の灯を戀ふ色や枕上ミ　（昭十一）

枯草　枯草や遠く人來る畑徑　（昭十四）

枯芒　鶉飛んで我に高さや枯芒　（大六）

大根　大根畠に片寄り太き轍かな　（大八）

葱　道白く天氣つゞきや葱畠　（昭十七）

昭和十八年十月十二日　印刷
昭和十八年十月十七日　發行

【非賣品】

編者　柴田宵曲

發行人　櫻井彌榮子
東京都目黒區上目黒五ノ二四八九

印刷人　株式會社新光堂
逸見春生
東京都荒川區日暮里町四ノ九七四

442
29

終